

アーチルニュース ちえなっぴ

発行元：仙台市発達相談支援センター 〒981-3133 住所 仙台市泉区泉中央2丁目24-1

TEL：022-375-0110 Fax：022-375-0142 e-mail：fuk005410@city.sendai.jp

<http://www.city.sendai.jp/kenkou/hattatsu/gaiyou>

“願い”を共有し、それぞれが主体として

春、生活に期待と不安が入り混じる季節。

最終学校の卒業は、誰もが毎日登校を保障されていた学校教育に別れを告げ、社会人として自分の人生を選択していく大きな節目の時期でもあります。しかしながら、成人期の地域生活に向けた社会的な取組みは途上であり、本人が自律した生活を送るための身近な支援者の確保、社会参加、就労、住まいの場などの選択肢は限られています。

アーチルでは成人期の課題への取組みとして、既存制度を活用できない発達障害の人たちの就労や社会参加につながる支援を模索しています。

今回の“ちえなっぴ特集”では、青年たちから発信された“仲間がいて、認めあえる安心できる居場所が欲しい”という共通のニーズに応える取組みと、その原動力を探りました。青年たちが個別の相談で自分の生きづらさや希望を語り、そして、本人、家族、支援者が同じ状況にある人たちと出会うなかで共通の願いを知り、両者で「ニーズ（必要性）」を浮き彫りにしてきました。そして、彼らと向きあう支援者が新たな社会資源の創出を自らの役割と捉え、互いに模索し、行動しながら真に必要なものを創り出そうとしています。

この取組みは、“「ニーズ」は一人ひとりの生活を語ること（相談）からつくるもの”そして、本人、家族、支援者、地域の人々、行政が願いをすり合わせながら、それぞれ自分には何ができてどんな役割（責任）があるかを考え、互いの強みと弱みを持ち寄るなかで“協働の力”が生まれることを示してくれました。

“かけはし”で紹介している誠さんは、自分と同じ障害を持つ後輩の子どもたちとお母さんが集う「初期療育グループ」に自らの意思でボランティアに来てくれることになりました。

彼ら青年の姿からどんな成人期を目指すか、どんな地域生活を目指すかが問われていると思います。

所長 今田 愛子

※ちえなっぴは「CHIN UP・前を向いて」の意味です。

「つたえあう」「むすびつく」「みとめあう」ことから ～地域活動推進センターでの取り組み～

高機能自閉症・アスペルガー症候群等の発達障害者のなかには、高校や大学等を卒業後、就労が難しかったり、続かなかったり、家庭以外に居場所がない…といった生活が続いている方が少なくありません。彼らは、知的障害者の福祉サービスの対象にはならないため、利用できる社会資源も極めて限定されています。

仙台市では、平成18年度から、彼らの日中活動を支援する場として「地域活動推進センター（以下「推進センター）」の整備を進めてきました。現在3か所（宮城野区・若林区・泉区）が開設され、各々のセンターが特色をもって、デイサービスを提供し、余暇活動支援や就労前支援を行っています。

推進センターは、発達障害がある本人と家族の切実な声とアーチルでの小さな取組みから始まっています。今回は、3年目を迎えた推進センターのこれまでを振り返りました。

①～本人・家族の願いを知る～

「青年グループ」「家族会」

平成14年、アーチルが開設すると、発達障害がある方の相談が急増。成人期を迎えていた本人たちから「仕事につけない」「安心して過ごせる場がない」、家族からは「家族以外の人間関係が作れない」「本人の将来が心配」との声…。その当時は、発達障害の障害特性に応じた支援の仕組みはほとんどありませんでした。

そこで、「本人と家族はどんな生活を望んでいるか?」「アーチルは何に取り組むべきか?」を話しあう場をもつことに。本人たちの余暇支援を目的とした「青年グループ」、家族同士の出会いを目的とした「家族会」を行うなかで、本人たちには「仲間が欲しい」「認めて欲しい」、家族には「身近な地域に本人が安心できる居場所が欲しい」という願いがあることが分かりました。

②～本人・家族が願いを発信、支援者につながる～

「アーチルの連絡会・連絡協議会」

アーチルでは、保護者や関係者からなる「発達相談支援センター連絡会」と「発達障害者支援センター連絡協議会」を設置、本人・家族が安心して地域のなかで過ごすためにはどうしたらいいか、継続的に検討しています。このなかで、「仲間が欲しい」「居場所が欲しい」という、本人・家族の願いを実現する社会資源のあり方についても話しあわれました。

この「連絡会」や「連絡協議会」の委員であったNPO法人職員や保護者のなかから、「青年や家族が身近で相談できる場、仲間と集える場を創って行きたい!」と考える人たちが現れました。

こうして、平成18年10月に「ほっとスペース歩°歩°（ぼぼ）」、平成19年1月に「ここねっと」、平成20年1月には「アクティブ」が立ち上がり、推進センターの活動がスタートすることになりました。

③～本人・家族・支援者が一緒に創る～

「地域活動推進センター」

推進センターでの日中活動（右写真「ある日の活動」⇒）を通じて、初めは自信のなかった本人たちが、徐々に自己肯定感を回復し、「就労したい」「今まで体験していないことにも取り組んでみたい」と発言するようになりました。

自信を回復してきた本人。その姿に勇気づけられた家族。それらが支援者の励みに。支援者は、さらに、周囲に理解されずに孤立している本人と家族をどう支援したらいいか模索しつづけました。

推進センターでは、本人・家族・支援者が、互いに気づきあい、学びあうような環境の中で、その人の段階に合わせた関わりを考えていく大切さを確認し、日々の活動に向きあうようになりました。



「ほっとスペース歩°歩°（ぼぼ）」



「ここねっと」

ほっとスペース歩°歩°



食器洗浄作業①



昼食の準備



食器洗浄作業②

様々な就労体験等のメニューがあります。
ホームページ近日公開予定



外出活動



余暇活動



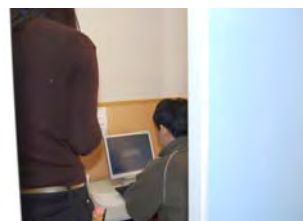
料理教室

様々なプログラムの中から選んで参加できます。
詳細はホームページで
<http://activeday.web.fc2.com/>

ここねっと



面接室



活動の振り返り



パソコンでの作業

個別活動から小集団活動まで、様々なプログラムがあります。詳細はホームページで <http://www.coconet.or.jp/>

家族の声

「何とかして就労させなければと思っていたが、今では本人の自信回復からと思うようになった」「子どもだけでなく、自分の思いを受けとめてもらえてよかった」「子どもが徐々に自信を取り戻していく姿を見て自分も何かできることはないかと思った」

本人の声

「認められて自信がついた」「自信がついたので、自分の得意なところを活かせる仕事がしたい」「飲み会や旅行会などみんなで楽しむ活動にも参加したいと思うようになった」

支援者の声

ほっとスペース歩°歩°（ぼぼ）：初めは、手探りで支援を始めました。社会の中で認められたいという本人たちの思いや家族の話から、働く場所の必要性を感じ、日中活動を通じた本人同士の関わりから、社会性が身についていくことに気づかされました。

ここねっと：本人が本当に求めているものは何か、そのために必要なことは何か、本人に寄り添って工夫をしたり、就労のことを意識した取組みを行いました。

アクティブ：障害者の親の立場から、地域の居場所づくり、地域の人たちとの交流の機会をつくってきました。本人たちは当たり前地域の人たちとの交流を本当は望んでいるということに改めて気づかされました。

本人・家族の願いを知ること、その発信を自分のものとして受けとめた支援者につながったこと。そんな経過があって立ち上がった推進センターでは、本人・家族・支援者の三者が、願いを実現するため、様々な活動に取り組み、結びつきを強めてきました。いずれの推進センターも、試行錯誤の繰り返しでしたが、そのこと自体、三者が互いに理解を深めたり、本人の状態を見極めて段階的に支援を行っていく必要性を考えることにもつながりました。

3年目を迎えた推進センターは、「発達障害者が安心して地域で過ごせる居場所」だけにとどまらず、地域の人々と結びつきながら、各々の持ち味を活かしつつ、「就労を目指した支援」、「地域に根ざした活動」へと展開、理解者も増えつつあります。活動を通じて、地域の人々に認められる機会を得た本人たちが、自信を持って自分の思いを伝え、新たな願いを地域に発信しています。その姿が「理解者ができる! 少しずつ広げていこう」という家族や支援者の励みにもなっています。

本人・家族・支援者が思いを共有し、取組みを通じてそれぞれが自信をつけていくなか、自分のできることを持ち寄って「一歩踏み出していこう」という機運が生み出される・・・
「伝えあう」「結びつく」「認めあう」、そして、それらを地道に繰り返し「続けていく」ことこそ、推進センターに集った人たちの更なる活動の原動力ではないでしょうか。



「アクティブ」

かけはし

「アーチル」とは「アーチ (arch : 橋)」と「パル (pal : 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思っております。



大好き先輩！ ～先輩と一緒に～

アーチル初期療育グループ“水曜マシュマロ組”に先輩がボランティアとして参加してくれました。

先輩の佐藤 誠 (さとう まこと) さんは32歳のダウン症の青年で、日々お仕事をしながら、休みの日を家業の手伝いと自分の趣味活動にあててきました。

アーチルセミナーにも登場してくれたので、ご存知の方も多いと思います。趣味も広く、バスケット、ダンス、スキーなど、どれもなかなかの腕前です。中でもスキーではスペシャルオリンピックス世界大会にも出場し、メダルももらっています。

ボランティアのきっかけは、お母さんが先輩として後輩にお話をしてくれる日にたまたまお休みが重なり、一緒に遊びに来てくれたことです。どうぞこの写真！後輩との遊び方上手でしょ！みんなニコニコ、先輩もニコニコ！

誰より喜んだのが後輩のお母さんたちです。このときとばかりに質問攻め。「結婚について考えたことありますか？」に先輩は「夢の中ではもうしてます。4人の子どもがいて車に乗せて公園に行き、バスケットを教えています。」とニコニコ答えました。お母さんたちもスタッフも「深い言葉」にいろいろと考えさせられ、特別の日になりました。「休みの日にまた来てもいいよ。」と誠さんは“水曜マシュマロ組”のボランティアに……。みんな大喜びです。このような療育グループ、全国にあるのかな？先輩お母さん、先輩ご本人と一緒にアーチルならではの療育を考えていきたいなと思います。「自立した青年期」をどう築くか？誠さんが発信してくれています。



第三回 療育セミナーを開催しました



2月21日(土)13:30からエル・パーク仙台ギャラリーホールにて、第三回療育セミナー「ケースワーカーみたいな弁護士と語る～発達障害児者が安心して暮らせるためにできること～」を開催しました。第一部は、発達障害の特徴を理解した弁護・相談支援活動を行っている札幌弁護士会の西村武彦先生の講演、第二部シンポジウムは、「今それぞれができること」のテーマで、ご家族、地域の保護司、障害者生活支援センター相談員のそれぞれの立場で話題提供をしてもらい、誰もが地域で暮らしていくための見守り体制や関わりについて考えました。



前日に積もった雪が残る中、会場はほぼ満員、皆熱心に参加していました。参加者からは、「西村先生のように全力で障害のある子と付きあってくれる人がいることが心強い」「障害者に限らず地域との関わりが如何に大切か」などの感想がありました。

編集後記：今回は発達障害者の日中活動支援をしている3つの「地域活動推進センター」を特集しました。推進センターの支援は、本人だけでなく、家族や支援者も、自分たちの活動が地域で認められていくことを実感して、自信を取り戻して行く取組みであると思われました。(成人支援係:井上・後藤)